

[エッセイ]

マールブルクにおける滝沢克己 —— 静かなる熟成の時 ——

芝田 豊彦

若き滝沢克己(1909-1984)にとって、ドイツと言えば、カール・バルト(Karl Barth)に出会ったボンをすぐに連想しますが、マールブルクもけっして忘れてはなりません。そこでここでは、滝沢克己に即して、ドイツ・ヘッセン州のマールブルクを紹介したいと思います。

1. ボンからマールブルクへ

1934年の夏学期に滝沢は、ボン大学でバルトの講義を聞いて鮮烈な印象を受け、哲学から神学研究へ一大転回を遂げます。しかし同年冬学期の11月22日早朝に¹、ナチス・ドイツ政府によるバルトの講義の停止を知ります。結局バルトは、ドイツの大学から追放されることになります。「出来るならば、私はカール・バルトの後を慕ってスイスへ赴きたかった」(『カール・バルト研究』序)²と後に述懐している滝沢ですが、当時はフンボルト財団給費留学生としてドイツに留まらざるを得なかったのです。そこで留学最後の1935年夏学期を、バルトの勧めもあって、ブルトマン等のもとで学ぶべくマールブルク大学に移るようになります。みずからの思索が、バルトに近いかブルトマンに近いかを見定めることが、滝沢にとって「当面の問題」となりました³。

滝沢は、1935年4月2日に当時まだボンにいたバルトに別れを告げ⁴、翌日の3日にボンを出発してマールブルクへ向かいます。マールブルク(Marburg an der Lahn)は、ライン川支流のラーン河畔の町で、ボンから東へ直線距離で120キロメートルほど離れたところにあります。マールブルクに近づくとは鉄道はほぼラーン川に沿って走っており、マールブル

ク北西7キロメートルのラーンタール（Lahntal）を經由して、北からマールブルク市内へ入ることになります。フンボルト財団のゲッペル博士宛て書簡（1935年8月19日付）では、「途中、美しいラーンタール〔ラーン溪谷〕を見て、本当に嬉しく思いました。ライン沿岸では考えられないような、愛すべき景色でした」⁵、と滝沢は記しています。

マールブルクに到着して数時間ほどして、滝沢はバルトに宛ててマールブルク到着を知らせ、ボン滞在中の好意に感謝しています（往復書簡第4番）⁶。そこでは次のように書かれています。〔「マールブルクに来て」私は初めてドイツに到着したかのような感じがしています。しかし、願わくは、この美しい町〔マールブルク〕にすぐに慣れて、自分の研究に沈潜することができるようになりたいものです』（26頁）。さらにこの書簡から、マールブルク滞在中の滝沢の住所がジーベル通り15番（Sybelstr. 15）であること、またその日のうちに大学を見学していることも分かります。

師バルトからもボンの友人たちからも離れた寂しさの故に、滝沢はマールブルクの美しさにいっそう心を動かされたのではないのでしょうか。そして「当面の問題」の解決に向けて、「研究に沈潜」することをみずからに課したように思われます。夏学期が経過するうちに思いがけなく、ボン以来の友人であったカール・ケスラー（Karl Keßler）を見出して、滝沢はおおいに喜びます（『カール・バルト研究』序）⁷。このことは、マールブルクの生活が基本的には静かな孤独のなかにあったことを示しています。自然的にも歴史的にも美しい環境に身を置いて、滝沢は内なる思索に集中することになります。

2. マールブルク大学

マールブルク大学の当時の建物は、現在ではアルテ・ウニ（Alte Uni）——「古い大学」——と呼ばれて神学部の建物として使われており、威風堂々たる当時のたたずまいを今でも感じさせてくれます（写真1）⁸。マールブルクはドイツの有名な四つの大学町のひとつで、当時は神学部で新約学のブルトマンが教鞭を取り、ドイツ中に知られていました。アルテ・ウニの中庭には、今もブルトマンの胸像が立っています。また



(写真1) マールブルク大学神学部

1903年に竣工された「講堂」(Alte Aula)は、いくつもの大きな絵画とステンドグラスに飾られた壮麗な空間を形成し、大学の式典にも使われています。

マールブルク大学は1527年に創設されました。そして大学創設と同時に、プロテスタントの礼拝形式がマールブルクに導入されます。すなわち、もともとカトリック教会であったマリア教会(Pfarrkirche St. Marien)がプロテスタント教会となり、大学付属教会の役割もはたすことになります。かくしてマールブルク大学は、世界で最初のプロテスタントの大学となります⁹。

日本との関連では、1923年に哲学者の三木清が、当時すでに有名であったハイデッガーの講義を聞くためにマールブルクに来了。ハイデッガーは1923年冬学期からマールブルク大学で教えながら、著作の執筆に取り組みます。そして1927年2月に『存在と時間』(Sein und Zeit)を刊行し、28年夏学期までマールブルクで教えることになります。そのあいだブルトマンとハイデッガーは同僚だったことになります。そ

してブルトマンはハイデッガーから影響を受け、実存論的解釈を聖書解釈の方法として用いたのです。なお、滝沢はすでにドイツ留学の前に、「ハイデッガーに於けるダーザイン Dasein と哲学の使命及び限界」という論文（滝沢克己著作集第1巻所収）を、ハイデッガーに批判的な立場から書いています。

3. マールブルクの景観 滝沢の印象

ゲッペル博士宛ての書簡では、初めて見たマールブルクについて、滝沢は次のような印象を記しています。「[4月3日の午後]二時少し前に汽車の窓から初めて、鋼鉄のように硬い性格をおびて山腹に聳え立っているマールブルクの町を見ました。ボン時代の知人を通してジーベル通り十五番に、小さな屋根裏部屋二部屋を見つけました。狭い通り道、昔のヘッセン地方の民族衣装、これら全ては、明るいライン地方から来た私に、日本の自分の大学〔九州帝国大学〕がある南の島〔九州〕から北日本の故郷〔栃木県宇都宮〕に帰って来たかの印象を与えました。もともと、このような雰囲気が好きなのです」¹⁰。ライン地方のボンと対比されて、マールブルクが滝沢の故郷と結びつけられています。もし風土ないし景観が思想と密接な関係にあるならば、ボンだけではなくバルト神学も相対化されているのではないのでしょうか。

写真2で、滝沢が初めて見たマールブルクの町の様子がおおよそ分かります。マールブルク駅の近くから撮影したものです。丘陵の上にあるのがマールブルク城で、二つの高い尖塔の教会がエリーザベト教会です¹¹。この二つはマールブルクを代表する歴史的建造物です。滝沢の下宿は城からも比較的近く、丘陵の高いところに位置しています。

4. ジーベル通り 15 番とその周辺

滝沢の下宿（写真3）からジーベル通り（写真4）を東へ向けてすこし歩いていくと、リッター〔騎士〕通りと名称を変え、先に紹介したマリア教会（写真5）のすぐ上を通ります。写真5の左の尖塔がマリア教会です。マリア教会からはマールブルク市街を一望でき、滝沢の下宿が



(写真2) マールブルク城（山上）とエリーザベト教会



(写真3) 現在のジーベル通り 15 番（四角の標識が 15 番を示す）



(写真4) ジーベル通り (ジーベル通り 15 番のあたり)



(写真5) マリア教会の近くからマールブルク市街の一部を見渡す

かなりの高台にあることが分かります。推測になりますが、滝沢は度々マリア教会での礼拝にも参加したのではないのでしょうか。

マールブルクへ来て一か月半ほど経過しても、マールブルクの印象は変わりません。滝沢はバルトに宛てて、「私はこの町が気に入っています。毎朝、早い時間に森を散歩し、新約聖書の数節を読むのは、私にとって大きな喜びです」(1935年5月19日付)と書いています。またゲッペル博士宛ての書簡でも同様のことが書かれています。「マールブルクの町は私に大きな喜びを与えてくれました。晴れた日の午後、ラーン川(写真6)の向こう岸から眺めると、特に美しくまた個性的です。最も好きなのが、城(写真7)のある山まで散歩をして、聖書を何箇所か読むことでした」(1935年8月19日付)。聖書に親しむ滝沢の日常が眼に浮かぶようです。リッター通りから北へ坂を登ると城へ行けます。かなり急な勾配です。またリッター通りをそのまま東方へ進んでいくと、右手南方に市の立つ広場と市役所(写真8)が見えます。広場から坂を下っていくと、マールブルク大学神学部とラーン川(写真9)に行



(写真6) ラーン川

マールブルクにおける滝沢克己



(写真7) マールブルク城とその周辺



(写真8) マールブルク市役所（前は市の立つ広場）



(写真9) マールブルク大学神学部とランン川

き着きます。このあたりの光景は、今も昔もそんなに変わりません。

5. 神学論文の誕生 マールブルクからの別れ

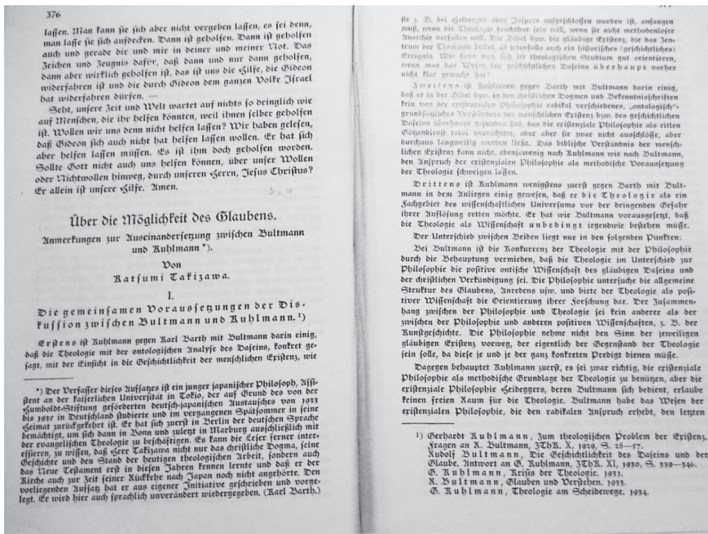
マールブルクでの研究成果において注目すべきは、バルトと共通な立場からのブルトマン批判であり、神学における滝沢の処女論文と言うべき論文「信仰の可能性について」が生まれたことです¹²。この論文はバルトに高く評価されて、1935年11月の『福音主義神学』(Evangelische Theologie)に掲載されることになります。これは滝沢克己著作集第2巻に収録されています。

滝沢がとても気に入ったマールブルクですが、1935年6月28日には、バルトやヴォルフ教授を訪問するために立ち去らねばならず¹³、三か月にわたるマールブルクでの生活も終わることになります。

しかし、マールブルクの思い出は消えることなく、滝沢の脳裏に刻み込まれていたようです。日本に帰ってしばらくして、滝沢は山口高等商

業学校に奉職することになります。そのことを知らせる 1937 年 3 月 28 日付けのバルト宛て書簡に、次のような箇所を見つけることができます。「山口は古い、小さな町で、美しくて、そう高くはない山々に囲まれています。ここに、かつて聖ザビエルは最初に住み、説教しています。ここにはプロテスタント教会も幾つかあります。[...] ここ〔山口〕もう春です——マルブルクのように静かで楽しく——ここに何年か住むことができるのを、喜んでいます」(75 頁)。そうです、マルブルクの名が出てくるのです。山口は、滝沢の故郷宇都宮と同様に、山や教会ないし神社といった景観において、マルブルクと共通点を有しているようです¹⁴。山口には、新しい勤務校である九州大学の近くに移転する 1948 年 7 月まで、およそ 11 年間住むことになります。

滝沢がドイツ留学において最初に学んだのは、1933 年晩秋から翌年初頭にかけのベルリン大学ですが、そこでの講義に関して滝沢は何も語っていません¹⁵。したがって、バルトのもとで学んだボンがやはり重



(写真 10) 『福音主義神学』所収の滝沢論文「信仰の可能性について」(Über die Möglichkeit des Glaubens)

要なのです。それに対してマールブルクは、滝沢にとってどのような意味を持つのでしょうか。まず言えることは、バルトから離れたところで、思索が熟成するために必要な静かな時とそれにふさわしい環境をマールブルクが与えてくれた、ということです。しかしそれとともに、マールブルクを媒介にして、日本の故郷的なもの（das Heimatliche）が正しく評価されるようになった、と言い得るのではないのでしょうか。

かくして上記論文の最後における〈聖書の外での神認識の事実的な可能性〉という問題、バルトにとって異質な問題¹⁶が提示されるのです。「しかし我々はキリスト者として、聖書の外で神について語ろうとする凡ての他の本や著述を、それらのものをただ一度も読むことなしに、頭から全く呪われた偶像崇拜であると断定しなくてはならないのであろうか。我々はキリスト者として、異教徒に対し、彼らが悪魔の子であると



(写真11) エリーザベト教会

いう、一步も退き得ない前提を以て立ち向かうことを許されるであろうか」(「信仰の可能性について」)¹⁷。マールブルクにおいてこそ、その後の滝沢の思想の発展を決定づける一步が踏み出された、と言っても過言ではないように思われます。

滝沢に即してマールブルクを紹介してきましたが、みなさんもドイツへ行かれることがあったら、メルヘン街道沿いのマールブルクに是非立ち寄ってみてください。そしてマールブルクの街並みを歩いた若き滝沢の姿を思い浮かべてください。(終わり)

註

- 1 「バルト先生の印象」、滝沢克己著作集第2巻(法蔵館)509頁。『カール・バルト研究』序、著作集第2巻6頁にも同様の記載があるが、11月22日という日付は載っていない。
- 2 著作集第2巻6頁。
- 3 「果してバルトの言った通り、[バルトよりも一層よく] プルトマンと理解し合うことが出来るかどうか、それを確かめることが、私にとって当面の問題であった」(『カール・バルト研究』序、著作集第2巻7頁)。
- 4 「或る日別れの挨拶を兼ねてバルトの家を訪れた。[…]'(『カール・バルト研究』序、著作集第2巻7頁)。「私が先生のお勧めにしたがってマールブルクに行くことを決心して、先生のお宅へお別れに上った時、[…]'(「バルト先生の印象」、著作集第2巻、512頁)。往復書簡第3番(1939年4月3日バルト宛て)でも、このバルト訪問について記されている。
- 5 往復書簡46頁。Lahntalという行政区域(Gemeinde)は、Marburg-Biedenkopfという行政区域(Kreis)のもとに属している。Marburgという行政区域(Gemeinde)も同様であり、その中核をなすのが狭義のMarburgである。なお往復書簡の訳は、寺園喜基訳(新教出版社)を微調整のうえで使わせていただいた。原著：Susanne Hennecke u. Ab Venemans (Hg.), *Karl Barth - Katsumi Takizawa. Briefwechsel 1934-1968*. Göttingen 2015.
- 6 往復書簡26頁。
- 7 著作集第2巻8頁。じつはこのケスラーこそ、滝沢生誕110周年記念論集『今を生きる滝沢克己』(2019年)の巻頭を飾る写真に、滝沢と並んで写っている滝沢の友人である(1935年1月撮影)。しかし、『今を生きる滝沢克己』には、マールブルクで滝沢がケスラーと再会したという事実は紹介されていない。
- 8 アルテ・ユニは、1874-78年に中世のドミニコ会修道院の基礎の上に建てられた

新ゴシック様式の建物である。

- 9 この段落は次を参照した。Ch.Z., *Die Pfarrkirche (Marienkirche) in Marburg an der Lahn*. (かなり詳しいパンフレット。発行年、発行地記載なし。)
- 10 往復書簡 46 頁。
- 11 まずマールブルク城 (Landgrafenschloss) は、1529 年にルター派とスイスの改革派とのあいだで、フィリップ方伯の仲介で宗教対話がおこなわれ、キリスト教史において有名である。両派を代表するルターとツヴィングリも参加したが、聖餐論で一致せず、両派の統合は残念ながら成功しなかった。ツヴィングリはパンと葡萄酒をキリストのからだの単なる「象徴」と見なしたのに対して、ルターは両者の「共在」を主張した。なお、マールブルク大学は、フィリップ方伯 (Philipp Landgraf von Hessen) によって設立されたので、彼の名が大学の名称に冠せられている。マールブルク大学の正式名は、Philipps-Universität Marburg である。
- 次にエリーザベト教会 (Elisabethkirche) は、聖人に列せられた王女エリーザベト (Elisabeth von Thüringen, 1207-31) の墓の上に、ドイツ騎士団によって建てられたカトリックの教会である。エリーザベトの貧者に対する献身的な奉仕は、よく知られている。ドイツで最も古いゴシック建築として、多くの巡礼者を集めた。
- 12 往復書簡 47 頁。
- 13 往復書簡 47 頁。
- 14 前田保氏のご教示による。
- 15 『カール・バルト研究』序、著作集第 2 巻 3-4 頁、「バルト先生の人と神学」、著作集第 2 巻 522-3 頁に、ベルリンに関する記載がある。後者は、「こうして、私は、一九三三年の十一月末、誰に学ぼうというあてもなく、ベルリンの駅に降り立った」という文で始まる。1933 年はその 1 月末にヒトラーが政権を取った年でもあった。
- 16 「何を、いかに、私はカール・バルトのもとで学んだか」、『宗教を問う』(三一書房) 96 頁。『カール・バルト研究』序、著作集第 2 巻 9 頁も参照のこと。
- 17 著作集第 2 巻 86-7 頁。この問いに対する答えは、この論文では与えられていない。「我々の叙述によっては、この問題は未解決のままである」(87 頁)。後に滝沢は、キリスト論の根本問題を解明することによって、この問題を解決しようとするのである。

この論文よりおよそ 20 年後のカール・バルト七十歳誕生日祝賀記念論集 (1956 年) で、滝沢は次のように書いている。「わたくしたちがたんなる人間、しかもまさにこの事実 [= 「神われらとともに」という事実]、わたくしたちのほんとうの自由の、唯一の源泉たるこの事実、まったく背を向ける罪人であるかぎり、聖書や教会のもろもろの儀礼による導きと訓練に、身をゆだねるということは、つねに必要な。しかし、もしわたくしたちが、そこから一見きわめてささいな一歩を進めて、聖書を教会の基準とするばかりでなく、神的啓示の唯一の源泉な

いしはまことの神の認識の排他的な原理〔＝聖書原理〕として立てるなら、わたくしたちはその瞬間すでに、かの唯一の事実そのものにおいて、堅く立てられている人間の限界を踏み超えているのだ。そのとき、福音への信仰はふたたび「文字への信仰」に墮する」（著作集第2巻、460-1頁）。

なお、ここに収録した写真は、2013年度関西大学在外調査研究員としてドイツ滞在中に筆者が撮影したものである。

(付論) 滝沢克己における「先験的主観」について

(1) 滝沢克己の論文「信仰の可能性について」(1935年)¹には、「神学者ブルトマンと哲学者クールマンとの論争に関する覚え書」という副題があるが、ブルトマン(R. Bultmann)は「信仰の先行的理解」を論じるにあたって、それに類比的な現象として、「友情の先行的理解」を取り扱っている。友情の先行的理解とは、たとえ友情を実際に経験していない者も、友情が何であるかを予め理解していなければならない、ということであった。それに対して滝沢は、カントに依拠して、「物理学的知識の先行的理解」を取り扱う。それは次のような理解である——「無知に於ても真知に於けると同様に明らかであり得る・いな既に明らかである・理解」(57)、「我々が物理学的に進んでいるかどうかには全く関わりない・最初のかつ最後の・先行的理解」(60)、「我々の理解の原動力であり審判者である先行的理解」(57)。さらにこの物理学的知識の先行的理解から、ブルトマンにおける「友情の先行的理解」が批判的に捉え返されるのである(62-3)。このように滝沢論文における III,1,a (物理学的知識の先行的理解について)は、きわめて重要な役割を演じるのである。

滝沢は、カントの先験的主観を論じる前に、「物理学的知識の先行的理解」について次のように述べている。

それ〔物理学的知識の先行的理解〕はいわば、物理学者としての我々が既にいつもその上にあり、その何処か一点に各々の研究しつつある実存(Dasein)が既に住んで居り、〔己の〕²主体 Subjektとしてのそのものから我々の知識が生き、〔己の〕客体(目的) Objektとしてのそのものへ我々の知識が向けられているところの生命ある・現実的な背景(der lebendige, reale Hintergrund)でなくてはならない。(57-8) (下線部は関係代名詞で、「背景」を受ける。)

そして次にカントの「先験的主観」について、滝沢は以下のように述べていくのである。カントは、『純粹理性批判』において、物理学的認識の根柢として「先験的自我」ないし「先験的主観」を承認した(58)。

滝沢によれば、「先験的自我」(das transzendente Ich)は、「現実的な生命ある背景であり、その統覚 (Apperzeption) 即ちその自己限定 (Selbstbestimmung) に基づいて、我々の物理的な知識が […] 可能となる」、言い換えると、私という研究する「経験的自我」が可能となるのである (58)。そしてこのふたつの自我 (= 先験的自我と経験的自我) が直接に相触れる点が、「感覚」とされる (58)。あるいは次のようにも言われる。経験的自我は、「感覚」という点において、直接的に先験的自我によって触れられ、限定されている³。

ところで先験的自我は経験的自我とは「全く別な大いさ」(58)であると言われているので、「感覚」という点は、まったく異なる先験的自我と経験的自我を結び付ける働きをしているのである。ここで注意しなければならないのは、この「感覚」は、抽象的なものではなく、「この・もしくはかの・全く具体的な・感覚」(diese und jene ganz konkrete Empfindung, 58)である、ということである。この「感覚」という点は、「すべて我々の労作がそこに絶え、そこから来り、それを目指して行くところの、物理学的研究のアルキメデスの点」、すなわち、「物理学的研究を殺すと同時にまたそのことによって生かす点」とも説明されている (59)。

またこの「感覚」という点は、経験的自我から見れば認識の「対象」⁴であり、「かの背景 [= 先験の主観] が現象する X として、超越的な客観 (Objekt) もしくは基体」(59)と考えられる⁵。このように経験的主観

3 58 頁 18-19 行、59 頁 12-13 行、60 頁 18-19 行。

4 「経験的な自我から見れば、それ [= 感覚] は対象であるが、先験の主観の限定の結果 (成果) として我々にとって直観的なものが故に、「現象」とも呼ばれる」(59)。

5 講演「物と人と物理学」では、カントが「対象」を「現象」と呼んで「物自体」と区別したことの積極の意味に言及される (38)。対象ないし物は、この講演では事実存在という面に注目され、次のように言われる。「物の事実存在には、それ [= ニュートン力学] だけではとうてい尽くされない何かが秘められている」(38)。「カントはけっして、「現象」は人間に分かる (人間の思惟によって把握しうる) けれども、「物自体」はそうはいかないと言ったのではなく、[…] そこ [= 物の事実存在] には何か人間の自主性・主体性というものを一切受け付けられない懼るべきものが秘められている、ということをやったのだと思われます」(38-9)。論文

(認識主観)だけでなく、超越的な客観(認識対象)、両者のあいだを結ぶ感覚⁶も、それぞれ先験的主観の自己限定によって成立するのである。したがって「先験的主観の自己限定」(die Selbstbestimmung des transzendentalen Subjektes)こそが、物理的研究の可能性の最後の根柢と言われるのである(59)。

しかしながら、アルキメデスの点と呼ばれる「感覚」なしでは、先験的主観の自己限定も考えることができないので、「物理学的研究の可能性はただ、それに於て経験的自我が全く異なったかの大きいさ〔＝先験的主観〕と相触れ、そこ〔＝先験的主観〕から限定されるところのかのアルキメデスの点〔＝感覚〕」を考慮することによってのみ理解される(60)、とも言われる。ついでながら III,1,c (信仰の先行的理解について)では、神と人を媒介するイエス・キリストが「信仰のかのアルキメデスの点」(69)と言われ、「我々の信仰を究極に於て可能ならしめる信仰の先行的理解は、三一の神の自己限定」(64-5)とされるのである⁷。

以上のような説明を受けて、「物理学的知识の先行的理解」とは、「先験的主観という・かのそれ自身明瞭かつ現実的な・背景」(jenes Verständnis des an sich klaren, realen Hintergrundes des transzendentalen Subjektes, 60)であると、滝沢は主張するのである。このように、ここではっきりと「物理学的知识の先行的理解」と「先験的主観」が結びつけられるのである。結局のところ、カントの先験的主観ないしその自己限定こそが、57-8頁で言われた「物理学的知识の先行的理解」、すなわち、物理学的知识の「生命ある・現実的な背景」(58)なのである。こ

「信仰の可能性について」では、その「懼るべきも」のに相当するのが、経験的主観とは質を異にする「先験的主観」なのであった。一般にカントの物自体は「暗黒のx」と思われているが、滝沢によれば、先験的主観は「それ自身明瞭(klar)かつ現実的な背景」なのである。

6 「この〔感覚という〕支点は、むしろ先験的主観の限定として〔…〕それ自身に於ては最も合理的な光であるところの感覚である」(58)。この引用の最後を、滝沢は「感覚でなくてはならない」と訳している。

7 「信仰の真実の可能性は、神の現実、神の自己限定〔…〕」(70)であるとも言われる。原文では、Gottes Wirklichkeit, seine Selbstbestimmungであり、滝沢の和訳では、「神の現実、その自己限定」(70)と訳される。ただこの訳し方では、「その」が神の現実を指すように取られる恐れがある。

の背景は、「主体」(57)であるとともに「客体」(58)であるとされたが、「先験的主観」という名称は、主体という面に着目した名称であると言えよう。

(2)「現代哲学の課題」という著作(1950年)⁸でも、独自のカント解釈に基づいて、科学的な対象認識について述べられる。滝沢によれば、科学的な対象認識ないし物を知ることが成立するのは、認識する者が「その物と同等の物として同じ現実の世界(=対象界)に置かれている」(20)、あるいは認識する者も「対象界の一点」(23)であるからである⁹。これは後述の著作では、「認識成立の第一条件」と言われている¹⁰。すなわち、認識する者が対象界の外にあって対象を眺めるというようなことではなく、みずからもひとつの物として対象界に属することによって初めて対象認識が成立する、ということなのである。したがって科学的な対象認識とは、「わたしという一つの物」が「その感覚において与えられた〔同じ世界の〕他の或る物に即して」(17)、「それ自身においてありのままに世界を映す」こと(20)、逆に言えば、その物が「同じ世界の他の一つの物〔=認識する者〕を通して」(17)、「それ自身の存在ならびに運動の一定の制約を〔…〕表示する」(17)ことなのである。

ここでは認識主観と認識対象の関係、知るものと知られるものの関係が、両者の同一として捉えられる。「知るものと知られるものの同一」(18)とは、「決して混淆することを許されない知るもの〔=認識主観〕と知られるもの〔=認識対象〕とが、この現実の一点¹¹においてただち

8 滝沢克己『新訂増補 現代哲学の課題』創言社、2008年所収。

9 滝沢のカント解釈によれば、『純粹理性批判』の眼目は、「当時の力学が科学的認識として成立するのには、〔…〕知るもの自身が最初から知られる物の世界のなかの一つとして事実存在していなくてはならない、という点にある」(『純粹神人学序説』37)。

10 『純粹神人学序説』72参照。

11 「現実の存在において」(19)とか「現実の場所(あるいはそれにおいてあるもの)」という意味において(19)と言ってもよいであろう。また次も参照せよ。「内なる自己が〔…〕ただちに外なる対象界の一点であり、逆にまた外の対象界が〔…〕すでに自己存在の根もとに於てその表現を待っている」(『現代哲学の課題』

に一つだという、真に弁証法的な、矛盾的自己同一の事実を意味する」(19)のである。

これに続いて滝沢は、カントの意識一般について次のように言っている。

かれ〔カント〕は、知るものと知られるものとがそれにおいて同時に成り立つ場所、それによってわれわれの経験が審かれる主体としての「意識一般」というものを考えた。(19)

対象認識という我々の経験が生じるためには、認識する者と認識される物が同じ場所において一つでなくてはならず、我々の経験もその場所に基づいて初めて可能となる。この場所は、著作「現代哲学の課題」では「世界」とか「対象界」と言われるが、論文「信仰の可能性について」では、物理学的認識の「生命ある・現実的な背景」(＝先験的主観)に相当するのである。また「我々の経験が審かれる」という表現は、同じくこの論文の「我々の理解の原動力であり審判者である先行的理解」(57)という表現に対応している。

(3) 滝沢の最晩年の日本物理学会での講演「物と人と物理学」(1984年)¹²では、「先験的主観」について次のように言われている。

事実存在するものは私の知識・意識とは全然別のもの(私の主体性・自主性を拒絶するもの)でありながら、まさにそのようなものとして、私にとってたんなる死物ではない、むしろそれ自身を私に告げ知らせる物です。一言でいうと、科学的認識の対象界はすなわち、そのなかの一対象として存在する認識主観に、それ自身の何であり、いかにあるかを告げ知らせるもの、いわばその映しとしてこの私(経験的主観)の対象認識が生成する「先験的認識主観」だということになります。(37-8)(引用A)

23)。「認識主観(自己)がそれ自身認識対象界の一点に置かれている」(『純粹神人学序説』72)。

12 『純粹神人学序説一物と人と一』創言社、1993年、所収。

後半の文章は分かりにくい。ここでは著作「現代哲学の課題」23で、次のように言われていることに注目したい。「決して外に出でえない内なる自己が、それにも拘らずその存在の根柢においてただちに外なる対象界の一点であり、逆にまた決して内になりえない外の対象界が、それにも拘らず、いわばすでに自己存在の根もとに来てその表現を待っているという事実そのものの反映として、「科学的な対象認識といわれるもの」が] 始めて成立している」(引用B)。引用Bにおける「内なる自己が[……]外なる対象界の一点であり」ということが、引用Aにおいては、「そのなかの一対象として存在する認識主観」という表現に組み込まれていることになる。そのように考えると、引用Aと引用Bの対応から、引用Aは次のように解するべきであろう。①「科学的認識の対象界」は、「そのなかの一対象として存在する認識主観に、それ [= 対象界] 自身の何であり、いかにあるかを告げ知らせるもの」である。②このことの映しとして、経験的主観の対象認識が生じる。③言い換えると、「科学的認識の対象界」は「先験的認識主観」ないしその自己限定なのである¹³。

また引用Aにおいて対象(界)が「それ自身の何であり、いかにあるかを告げ知らせる」ということは、「外の対象界が[……]すでに自己存在の根もとに来てその表現を待っている」(引用B)、あるいは「[物がわたしを通して] それ自身の存在ならびに運動の一定の制約を[……]表示する」(『現代哲学の課題』17)ということに対応しているであろう。

当該箇所(引用A)の注8においては、端的に「事実存在する対象界即先験的主観」(72)と表現されている。著作「現代哲学の課題」では、知るものと知られるものとの同一性、また知るものと知られるものがそれにおいて同時に成り立つ場所としての意識一般に言及されたのであった。また論文「信仰の可能性について」では、先験的主観が現象することによって、超越的な客観が成立するのであった。このように、それ以前の著作ですでに実質的に表明されていた「対象界即先験的主観」

13 先験的主観の自己限定によって、経験的主観の対象認識が成立する(論文「信仰の可能性について」参照)。

ということが、この講演ではっきりと主張されるのである。このような捉え方は、カント哲学の常識的な捉え方と異なるかもしれないが、滝沢によれば、このように捉えない限り、「先験的主観はたかだか経験的主観の内部から要請され想定される規範のようになってしまう」(72)のである。

以上、滝沢の青年期、中年期、晩年の三つの著作を取りあげ、「先験的主観」ないし「意識一般」についての滝沢独自の解釈を見てきた。それぞれニュアンスは異なりながら、西田哲学的な場所的思考ないし「矛盾的自己同一」的思考に貫かれているのを確認できるのである。